



自由民権運動に女性の地位向上を懸けた先駆的活動家

中川 幸子 (1857~1910)

中川幸子は、安政4年(1857)西加積村上島(現滑川市上島)の中川弘光の三女として生まれた。中川家はこの地方を開拓した郷土であった。父弘光は、4年間の江戸での遊学、さらに樺太探検などで研鑽を積んだ後、郷里で塾を開いた。幸子はこの父の元で幼い頃から漢学と儒教を学び、賢く学問好きな娘に育った。

明治6年(1873)幸子は、17歳で下条村五郎丸(現富山市水橋五郎丸)の豪農松波秋成に嫁いだ。親の決めた縁組みで、7歳年上のいとこでもあった。秋成は、金持ちの若旦那そのままに妻・家庭を顧みず放蕩三昧の生活で、厳格な父の元で教育を受けた幸子には耐え難いものであった。幸子は明治12年(1879)夏、離婚を決意し、二人の子どもを残して実家に戻った。そして、富山の地を離れ、その後上京。離婚をめぐる深い悲しみ・悩みに苦しむ幸子を深く感銘させたのはルソーの「社会契約論」だった。もっと自由な人間として生きていくために、学び、人の役に立つ活動をしなければならないと思つての決意だった。

上京後、幸子は父の伯父である小永井小舟を頼った。小永井は勝海舟と共に咸臨丸で渡米した儒学者で、浅草新堀で私塾を開いていた。幸子はここで日夜勉学に励み、英語・数学・フランス語まで修得したという。

この頃の東京は、文明開化により自由民権運動や女子の教育熱に満ちていた。こうした中で、幸子の目は、社会を変えるための運動、女性の地位向上のための運動に向いていき、頭山満に教えを受け、その後、板垣退助の門下に入った。尾崎行雄や犬養毅等ともこの頃から親交があった。女性運動家は当時極めて珍しく、明治20年(1887)の栃木県での演説会では、数百人の聴衆の中で唯一の女性であった幸子が、演説の大事なところに来ると「謹聴」と叫び弁士を応援して周囲を驚かせたと新聞に報じられている。また、紫袴を身につけ度々演壇に立ったといわれ、明治23年(1890)の東京木挽町での演説会には千人にも達する聴衆が集まり、男子席にまで溢れるほど多くの女性たちが集まったという。その後も神奈川県や東京の各地で男女同権演説会を開催するなど、岸田俊子や景山英子と並び「民権の三女傑」の一人と称された。

しかし、国会開設が政府により約束されると、民権運動が衰退し始める。幸子ら女性運動家は女性の地位向上と権利拡大を願っていたが、自由民権運動もまた男性中心に考えられていた中で、その訴えはなかなか受け入れられなかった。明治23年(1890)には女性運動が盛んになることを警戒した政府が、「集会及び政社法」を制定し、女性の政治活動を全面的に禁止した。

幸子は、その後、国の役に立つ次代の人材の育成をしようと青少年の教育に力を傾け、明治35年(1902)東京麹町に苦学生を支援する私塾「三省学舎」を開いた。極めて小規模ながらも女性による私塾という点で、東京では異色の塾として有名であったが、資金繰りは常に苦しく、前述の尾崎や犬養・頭山らが援助した。立山町出身の翁久允もここで学んだ。深い学問の知識と自由民権活動を通して得た人生経験に基づいた指導をしたが、後継者には恵まれず多くの人材育成には至らなかった。

裁縫や細工物も得意で人情に厚かった幸子は、明治43年(1910)三省学舎で波乱に満ちた生涯を閉じた。享年53歳であった。

平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



アリアンサ富山村創設の父

松沢 謙二 (1901~1963)

明治34年(1901)金沢市に生まれる。農商務省勤務を経て、大正14年(1925)、福野農学校(現県立南砺福野高等学校)の教諭となり、昭和2年(1927)、婚姻により高岡市の松沢籍に入った。当時の富山県のブラジル移民の募集に、いち早く応募し、昭和2年、移民協会の現地責任者となってサンパウロ州ミランドポリス市第三アリアンサ地区に先発派遣されたが、開拓には困難を極めた。

数年後ようやく安定した生活に入るが、勤める富山移住事務所が窮乏し、昭和8年(1933)に閉鎖すると、その後は、一開拓民として生計を立てた。マラリアに侵され、昭和38年(1963)に苦難の一生を終えた。